

琉球大学学術リポジトリ

ニューカレドニアにおける太平洋戦争開戦前夜の日本人移民社会 —ヌメアを中心に—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大石, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010151

報告1

ニューカレドニアにおける太平洋戦争開戦前夜の
日本人移民社会—ヌメアを中心に—

大石太郎

ニューカレドニアの日本人移民は、1892年というかなり早い時期に移民が始められているにもかかわらず、これまでほとんど研究されてこなかった。フランス語圏ということに加え、当時の日本人自身の記録がこれまでにあまり発見されておらず、日本人移民に関する資料が非常に少ないことも一因であろう。本報告では、1933年8月にニューカレドニア当局が実施した日本人移民の調査報告（ニューカレドニア公文書館所蔵）を資料として、太平洋戦争開戦前夜のニューカレドニアにおける日本人移民社会の復元を試みることを目的とする。

ニューカレドニアへの最初の日本人移民は、1892年にニッケル鉱山の契約移民として上陸した熊本県出身者である。その後、1919年までに5,581名の日本人がニューカレドニアに渡った。そのほとんどが単身男性であり、彼らは鉱山との契約期間満了後、各地で農漁業を営んだり、首都ヌメアに出て商業に従事したりしていたとされる。しかし、1941年12月の日米開戦直後、自由フランス亡命政権を支持する当局は日本人を一斉に逮捕し、オーストラリアに強制送致した。そして戦後は日本に強制送還され、ごくわずかの例外をのぞいて移民がニューカレドニアに戻ることはなかった。

1933年8月の調査は総督の指示に基づくものであり、28の警察管区からの報告には、調査官による観察事項をまとめた文書が添付されている。ここに記録された日本人の数は1,124名であり、そのうち302名がヌメア管区に居住していた。なお、この数字は成人男性のみのもので、原則として女性と子どもは含まれていない。

ヌメア管区からの報告における日本人移民像は次の通りである。まず、正式な婚姻関係は少ないものの、ジャワ人や先住民との内縁関係が多い。野菜栽培に秀でており、金銭的援助を含めた助け合い精神がある。ただ、日本人小売業者の先住民へのアルコール提供は問題である。そして、人種間関係は良好で、さしあたりヨーロッパ人にとって脅威ではないが、将来的には脅威になる可能性がある」と結論している。ここからは、都市近郊の集約農業をニッチとし、また頼母子講のような存在があったことがうかがわれ、小規模ながらカリフォルニアの日本人移民社会などと同様の傾向がみられる。

しかし、ニューカレドニアの日本人移民社会が大きく発展することはなかった。しばしば指摘される第一次世界大戦後のフランス・フランの下落に加え、人間、物資ともに、イギリス帝国の自治領という国際的地位のあいまいなオーストラリアを経由せざるを得ないことによる、さまざまな不利益も発展の阻害要因であった。